

2015年度森泰吉郎記念研究振興基金研究報告書
他者との協働学習によって開拓される自己と言葉の学び
～「複言語的アイデンティティ」に関するインタビュー調査～

政策・メディア研究科 / 修士課程1年 / 81524907 / 藤谷悠

0. 実施期間・実施場所

実施期間：2015年9月1日～14日

実施場所：フランス共和国パリ市内

1. 研究背景と問題意識

言葉というものは確かに便利なツールではあるが、そのみに留まらない可能性を秘めたものである。外国語は母語とは全く異なる性質を持った言語であり、それ故に外国語を学ぶことは学び手のアイデンティティを変容・拡張せしめる力を持ったものです。言語は自身の生活に密接に結びついたものである。だがそれでいて、単に生活を上手くやりすごすためのものでもなく、生活の中の自分が変わっていく可能性を秘めたものなのである。そうした言語の姿は、その言語を用いて生活する文化的他者との出会い、そして彼らとの生身の対話を行うことによってこそ見出せるものではないだろうか。

他者の存在とは如何なるもので、またそれと向かい合う自分自身の有り様はどのようなものであるのかという視点から、多文化社会に生きる人間としての思考を深めていくような言語教育環境構築が私の目指すべきところである。

2. 事前に行ったフィールドワークと研究の枠組み

本フィールドワークは、上記したような背景に基づいて現在私が行っている具体的な個人研究である「『ハーフ』の人々のアイデンティティ調査」に関するインタビューデータ収集を目的として実施した。ハーフの人々のアイデンティティを調査しているのは、「複文化的アイデンティティ」を有していると考えられる対象に含まれているからである。

本研究の中で用いる「複文化的アイデンティティ」とは、複数のナショナルリティや国際的な文化性が、同一個人の中に織り交ぜられて形成されているアイデンティティである。このアイデンティティを持つ者として、具体的には、両親から複数のナショ

ナリティを受け継いだハーフの人々以外に、成長の過程の中で複数の国を渡り歩いてきた帰国子女、あるいは本人や親が他の国に移り住むことによって、新旧のナショナルリティや文化性が交差することとなる移民の人々といったような存在を考えている。

ハーフの人々へのインタビュー調査は本フィールドワーク実施以前から日本で複数の対象者に対して行っており、そのうちの多くは、私のフランス語にまつわる活動の中で触れ合うこととなった、日本人とフランス人のハーフの人々であった。ハーフの人々への調査のきっかけとなったのは、日仏ハーフの学生・Aが、「私はもっと『フランス人』になりたい」と語ったことである。Aは、日仏ハーフでありながら、大学に入るまではフランス語をほとんど話せない状態であった。それでいて、容姿の雰囲気はフランス人的であることから、周囲からは「外国人」として扱われることも日常茶飯事であった。そのようなギャップを埋め合わせたいという思いに加え、自分がアイデンティティとして持って生まれた複数のナショナルリティのうち、日本側にだけ偏っているバランスを、よりフランス側に引き寄せたいという思いも折り重なった結果の発言であったということが、Aへの詳しいインタビュー調査から分かった。

Aへの調査をきっかけとして、様々な日仏ハーフの学生にインタビューを行ったが、その「アイデンティティのバランス」は多種多様なものであった。例えば、学生・Bは、Aとは逆に「『日本人』になりたい」と語った。幼い頃から日本での生活に満足しており、学校でも友達も多く楽しく過ごしていたが、両親の方針によって半ば強制的にフランスへの留学をさせられ、その際に日本の学校からの転校を余儀なくされた。留学先での生活はBには肌が合わず、苦痛を強く感じていたという。その体験がBのアイデンティティの中にあるフランス性に対する嫌悪感へと結びついてしまった。

学生Cは、AとBの両者とはまた違うアイデンティティを持った学生であった。Cは、「無国籍である自分」というものに強いアイデンティティを感じていた。日本で生まれて日本で育ちながらも、日本に帰属する意識はなく、フランスに対してもそれは同様であった。Cのようにどこのナショナルリティにも帰属しないアイデンティティを持つ人々を、「Third Culture Kids(TCK)」と称することもある¹。

上記したように、同じハーフというカテゴリーの中で見ても、各個人によってそれぞれのアイデンティティの様相は異なるものとなっている。それぞれ「ナショナルリティの重なり合い」という変数による影響を受けたアイデンティティとなっているが、人生の過程の中での「各個の経験」によってその発露の形態は変わる事となる。

この「各個の経験」のような個別の変数に着目し、「複文化的アイデンティティ」の発露の仕方が、どの変数によってどのように変化するかを調査する。したがって、

¹ 関口知子(2007)「移動する家族と異文化間に育つ子どもたち--CCK/TCK 研究動向」『南山短期大学紀要』(35),pp.205-232.

本研究は「ハーフのアイデンティティ」といったまとめ方をするような一般化された結論を求めるものではなく、個別の対象の一人一人に対して深く掘り下げるような、ケース・スタディを追求した研究形態となっている。修士論文の執筆における手法としては、ライフストーリー型のエスノグラフィーを軸として考えている。

3. 本フィールドワークの概要

今回のフィールドワークでは、上記した個別の変数のうち、「生育環境」としての土地の差異に着目したものである。日本でインタビューを行った日仏ハーフの学生たちは、皆同様に日本で生まれ育った学生であった。それに対して、今回の調査対象者としての日仏ハーフの学生たちは、フランスで生まれ育っている。この環境要因によるアイデンティティ形成の差異に着目しながら、インタビュー調査を行った。

調査前に据えた仮説の一つとして、「単一民族幻想」がある日本と「多民族国家」であるフランスとの社会的背景による影響の差は大きなものではないかと考えていた。日本では「日本人は単一民族である」という保守的な幻想があるからこそ、それに適合しない日本人は、彼らが思うところの「日本人」として受け入れられることはなく、エスニシティを異にする者としての他者として切り分けられることとなる。具体例を挙げるならば、メディアでも取り上げられて話題となっていた、宮本エリアナさんの事例が特徴的だと考える。エリアナさんは、2015年度のミス・ユニバース世界大会の日本代表に選出された、長崎県出身のハーフの女性である。父がアフリカ系アメリカ人ということもあり、彼女は黒人女性のようなエキゾチックな容姿を持っている（図1参照）。



[図1：宮本エリアナさんの容姿（Huffingtonpost より引用²）]

² Huffingtonpost 2015年5月7日配信記事「宮本エリアナさん「人種への偏見、日本と世界からなくしたい」【ミス・ユニバース日本代表】」
http://www.huffingtonpost.jp/2015/05/07/miyamoto-ariana-interview_n_7229170.html

エリアナさんが日本代表に選出されたというニュースに対し、「彼女は日本人ではない」「日本代表として相応しくない」という意見を持つ人々の反応が話題となった。こうした反応は、まさしく先述したような日本における単一民族幻想がベースとなって起こったものであると考える。柳田(2015)³によると、日本人には特殊な内と外との概念が発達しているという。その概念によって「割拠分立」した状況を作り出しており、その状況を基として、内輪に対してはやや身びいきになり、外を見る目はそれだけ冷たくなる(柳田,同)。エリアナさんの事例に対しても、日本人が持つこのような意識が作用したものと考えられる。保守的な単一民族思想を基として、日本人を「純粋な日本人」とそれ以外という切り分けを行い、切り分けた外側の対象に対して冷淡な態度を取っている。

こうした社会背景が存在する日本においては、ハーフの人々は、エリアナさんの事例のように、ハーフというカテゴリーの中に押し込められて、区別されてしまうことともなってしまう。その区別の具体的な要因となるものは、端的に容姿であったり、使用する言語状況であったり、あるいはハーフであることそのものであったりする。

それに対して、多民族国家として様々な人種が混在しているフランスでは、歴史的に民族間で血が混ざり合っていたり、現在に至ってもなお移民も増え続けていたりする状況があり、「純粋なフランス人」というものをそもそも定義しにくい。そうした社会背景においては、ハーフという要素がやたらと特徴化されにくく、むしろ当たり前前の存在として社会の中に溶け込んでいるのではないかと考えられた。

このように好対照な社会背景を持つ環境要因を軸として、日本で生まれ育った日仏ハーフとフランスで生まれ育った日仏ハーフの両者を比較することで、社会背景が与えるアイデンティティ形成への影響を如実に浮かび上がらせることが出来るのではないかという想定の上に、本フィールドワークを実施した。

4. 調査対象

本フィールドワークでは、現地で生まれ育った日仏ハーフ以外にも複数の対象に調査を行った。具体的には、フランスに留学中の日本とウクライナのハーフの学生、および、日仏ハーフが多く通う現地の中学・高校で日本語授業の教鞭をとる日本人教師の方に、それぞれインタビュー調査を行った。

前者に関しては、本フィールドワークの主目的である日仏の社会的環境要因による差異の抽出には直接的に関係しないが、ハーフの学生が持つアイデンティティ調査という、個人研究の中でのより広い枠組みにおけるデータ収集を目的としたものとなっ

³ 柳田国男(2015)『日本人とはなにか』河出書房新社

た。

後者へのインタビューを行ったのは、フランスで生活するハーフの子供達が日仏をまたいだ複文化的アイデンティティを形成する際に大きな影響を与えることになるであろうと考えられる日本語教育に携わる教師の目線から見た、彼らのアイデンティティの変容過程を知ることが出来るのではないかと考えたからである。

インタビュー調査対象者のリストは以下の通りである。

【インタビュー調査対象者リスト】

- ① パリ在住の日本とフランスのハーフの学生：2名
- ② パリに留学中の日本とウクライナのハーフの学生：1名
- ③ パリにある日仏ハーフの学生が多く通う中学校・高校の教師：1名

5. 調査方法

調査方法は、各対象者へのインタビューと、調査者である筆者によって行われるその記録によって構成されている。インタビューデータの記録収集は、各調査対象者の了承のもと、iPhoneのボイスレコーダー機能を用いて録音を行っている。

調査対象者へのインタビューは、非構造型の形式を採った。本研究における最終目的は、少数の対象者ごとに「厚い記述」を行うようなエスノグラフィーを完成させる事であり、そのためには調査対象者から、より自由で、より深い発話を引き出す必要がある。あらかじめ項目が決められているような構造に縛られた形式のインタビューよりも、非構造型インタビューの方がその目的に適していると判断したため、本研究ではその形式を採用するに至った。

インタビューデータに基づく記述の中には、調査対象者の特定を避けるために、各所筆者の判断において内容の趣旨に影響が無い程度にキーワードの変更や削除を行っている箇所がある。

6. 調査結果

この項ではインタビュー調査の結果とそれに基づいた考察を、対象者ごとに分けて詳述していく。

【①パリ在住の日本とフランスのハーフの学生たち】

本フィールドワークでは、2名の日仏ハーフの学生にインタビューを行うことが出

来た。インタビューを行った2名は、どちらも以前からの知り合いであり、調査前の段階における「ラポール」の構築は出来ていた。そのおかげで、対象者のアイデンティティに関わる深い部分にまで聞き取りを行えたのではないかと考えられる。

調査対象者の一人目は、パリの大学院に通うエイミー（仮称）である。エイミーは、フランス人の父と日本人の母の間に生まれた。生まれも育ちもフランスである。現在のエイミーは、毎年夏に母方の実家がある日本に旅行しに行くことはあるが、それ以外の日々はフランスで過ごしている。言語状況は、日本語もフランス語の両方を母語として扱えるレベルにある。

エイミーと私は、共通の知人・Dを通じて、本フィールドワークを行う半年ほど前に知り合っていた。エイミーとDは、パリにあるT学校（仮称）という中高一貫校で同級生だった仲で、この学校が今回のフィールドワークでのちにインタビューを行うことになる日本人教師の方が所属する学校である。

T学校は、日仏ハーフの子供や、パリに在住している日本人家族の子供など、日本に関係のある子供たちが多く通う学校で、彼女たちはそこで日本語・フランス語を学んでいた。エイミーからは、この学校の教育制度についての話も聞いた。T学校には、「OIB(Option International du Baccalauréate)」という、国際バカロレア取得を目指すコースがあり、その中で国際バカロレアにおける選択科目としての日本語科目を集中的に学ぶ授業がある。エイミーとDは、共にそのコースを受講していた。

OIBでの日本語授業の履修者は、学期を経るごとに徐々に人数が減っていくのだという。というのも、その他の科目に比べ日本語科目を利用して国際バカロレアで高得点を取るのは難易度が高く、最後の学期まで科目履修を続けるモチベーションを保ちにくくなっているためである。そのような形で、中途段階でOIBの日本語授業の履修を取りやめた人々は、学習頻度やレベルを落とした「LV1」という別のコースに切り替えて日本語学習を続ける者もいるが、完全に日本語学習を中止する者も少なくないという。

それほどに過酷とも言えるようなOIBの日本語授業を最後まで継続する学生たちの日本語学習へのモチベーションは、それぞれでとても強いものがあるのではないかとエイミーは語っていた。エイミー自身もその一人であるが、自分の持つ「日本人性」に対するこだわりが、そのモチベーションの一部を成していたのではないかと、彼女自身は分析していた。

エイミーが自己内の感覚として持つその「日本人性」というものにまつわるエピソードとして、彼女が映画『風立ちぬ』を観た時の話を参照する。エイミーは、『風立ちぬ』を日本の映画館で初見した。その時には、「普通に日本人として観た」「悲しいところ（場面）では悲しくなったり、日本人的に、日本人なりに楽しんだと思った」という。

その半年後に、『風立ちぬ』がフランスで公開され、エイミーはフランス人の友達とフランスの映画館へ再び観に行くこととなった。その時の自身の感覚として、「その時はフランス人として観ているように思っちゃったの。笑いのツボも違ったし、面白いって思える場面も全然違ったのね」「確かに『みんなそこ笑うところじゃないのに』って日本人的に思ったりはするんだけど…」と語っている。「フランスで観た時も日本語版の上映を観ただけで、こっち（フランス）にいるとフランス人として無意識に行動しちゃうんだな、考えちゃうんだなって思った」のだという。

その時に自分がいる土地、あるいは空間を共にしている相手によって、自分の中の日本人性とフランス人性が無意識のうちに切り替わる。こうしたエピソードは、二人目の調査対象者であるミカ（仮称）からも聞くことが出来た。

ミカは、エイミー同様にフランス生まれフランス育ちで、父がフランス人で母が日本人のハーフである。現在はパリの高等師範学校（グランゼコール）に通っている。ミカの言語状況は、本人によると、「フランス語の方が親しみやすい言語。日本語はほぼ問題なく聞き取ることも話すことも出来るが、フランス語の方が表現豊かに話せる。日本語は特に読み書きの面でまだまだ不安がある。漢字が苦手」というような状況である。

ミカは、私が学部時代に所属していた日本とフランスの大学生が交流する団体のフランス側メンバーの一人であった。ミカの見た目は色濃く「フランス人っぽい」容姿をしているのだが、彼女自身は自分のハーフ性に強い愛着を持っている。ハーフ性の対をなす「日本人らしさ」を垣間見せるものとして、着物を着こなしたり、琴の演奏を行ったりしている。日仏学生交流団体での活動中にも、フランス側メンバーと日本側メンバーの仲介を、言語的にも文化的にも行うように意識していたという。まるで二つの異なる文化性が、彼女の中で存分に混ざり合った様相を見せているように、私には思えた。

自身のハーフ性のうちのどちらかに偏りがある、あるいはTCKのようなアイデンティティを持った人たちには出会ってきたが、ミカのように「ハーフであること」それ自体に強い自意識を持っていることを表明する対象者と出会ったのは初めてだった。フランスにいれば「おいしい日本料理屋を教えてくれ」と頼まれたり、日本に来れば「お人形さんみたい」と容姿を誇張的に扱われたり、自身のハーフ性に基づいた「ステレオタイプ体験」をそれぞれの土地によって感じさせられることは多いが、ミカは決してそれをネガティブに捉えてはいない。むしろ、自分を特徴化してくれるハーフ性を、ひたすら積極的に捉えている様子であった。本当に日本とフランスのどちらかに思い入れの偏りは無いのかを確かめたいがために、少々意地の悪い質問として、「日本とフランスのどちらが好き？」などと問いかけてみたが、「それは本当に難しい質問！選べないなあ」と彼女は答えた。その答えに続けるように、「将来どちらの

国で仕事をするようになるかわからないけど、どちらの国で働くにしても自分の日本性・フランス性を活かせることをしたい」と言っていた。

【②パリに留学中の日本とウクライナのハーフの学生】

ユリア（仮称）は日本とウクライナのハーフであり、私と同時期に日本の大学でフランス語を学んでいた。現在は大学を卒業し、パリのグランゼコールに進学している。

ユリアは、日本の大学に入学するまで、ウクライナのインターナショナルスクールに通っていた。そこで、様々な国籍の人々と交流したことが、自身のアイデンティティの形成に強い影響を及ぼしたと語った。日本やウクライナに思い入れは確かにあるが、それよりも明確に TCK としてのアイデンティティを持っているようだった。「どこか一箇所に留まるよりも、常に様々な所に移動したい。世界中のいろんな場所で活動してみたい」という彼女の言葉には、それが現れているようだった。生まれ育ったウクライナを離れて日本に渡り、大学時代を過ごした日本からもまた離れてパリに移り住んだ彼女の現在は、まさにその「移動活動」の一環なのだろう。

ユリアのように TCK を自認する人々にとって、「どことどこのハーフ」といったようなこと、あるいは「何語を話せるか」ということなどは、それ自体に大した意味はない。そうではなくて、それらを「越境」したところにある価値観に意味を見出して、そのような価値観を共にする人々と共鳴しているように私には思えた。このようなコミュニティや繋がりや関係の在り方が有り得るのだとしたら、その中では、文化にしろ、ナショナリティにしろ、言語にしろ、それぞれに「境界」を設けられて個別化していたそれらのものは、その境目が融解して、全てが混淆しているのであろう。

グローバリズムというものが行き着いた先の現代の一つの姿として、「見えなくなっていたが実際はずっと存在していた境目」同士が、ある日突然に再現前化して、激しくぶつかり合ってしまうような出来事が、各地で頻発している。最近もそうした出来事が、私が今回フィールドワークを行ったパリという土地でも再び起きてしまい、多くの人が命を落とすことになってしまった⁴。「境界」を巡る考え方や捉え方は、今後のグローバリズムにおける非常に大きな課題であると考えればこそ、その境目を（形式的にではなく）本当に溶かしきって無くしてしまったかのような TCK たちの生き方には、何らかの示唆が含まれているのかもしれない。

⁴ 朝日新聞デジタル 2015年11月15日配信記事 「パリ同時テロ、128人が死亡 I Sが犯行声明」 <http://www.asahi.com/articles/ASHCG5GFKHCGUHHI02G.html>

【③パリにある日仏ハーフの学生が多く通う中学校・高校の教師】

T 学校の教師・田中さん（仮称）へのインタビューは、私の大学にいる T 学校出身の学生・F からの紹介によって実現した。F のように、T 学校での学習を経て、日本の大学に入学するような学生も居る。F もまた、OIB コースに所属し、日本語の集中授業を受けて、国際バカロレアを取得した学生である。

田中さんは、T 学校で既に 20 年近く教鞭を取っている。田中さんからは、ハーフの学生たちの身の振り方、授業への取り組み方、日常の中の機微、家庭の教育方針による差異など、現場に根付いた教師目線からでしか観察し得ないような話を多く聞かせてもらった。その中でも、家庭の方針と学生たちの身の振り方との関係についての話は、興味深かった。フランス国内でより高いキャリアを求める学生にとっては、わざわざ高難易度の日本語科目を取らずとも、その他の主要科目の学習に力を入れた方が、バカロレアでの高得点獲得を効率的に狙うことが出来る。そうした学生にとっては、日本語を集中的に学び続ける意味が薄くなっていき、そうして遂には OIB クラスから離脱していくというようなケースが多いという。エイミーも言っていたことだが、OIB での集中的な日本語授業を最後まで継続するのは、日本語習得に対して各々に強いモチベーションを持っていたり、自身の持つ日本の文化性に深い愛着を抱いていた学生だけであり、そうした学生はごく少数であるという。

また、田中さんは T 学校と同時に、パリのインターナショナルスクールでも日本語の授業を持っており、両校の持つ特徴を同時に伺うことともなった。そのおかげで、一般的な学校との差異をより対比的に知ることが出来た。田中さんが T 学校やインターナショナルスクールのような国際色豊かなカリキュラムがある学校と、ごく一般的なフランスの学校との校風の差異として挙げていたのは、「フランス人」になることを求めるかどうかという点である。

フランスの中でも、特にパリにある一般的な学校は、共和国の一員としての役割を求めるような啓発を、教育現場の中におき混ぜていく傾向があるのではないかという。そうして「フランス人」や「フランス国民」としての共通意識を持たせることこそが、共和国の基盤を支えるからであろう。それに対して、T 学校やインターナショナルスクールは、学生個人の個別の背景を尊重するような校風があり、パリやフランスという枠組みに縛られない。こうした校風を持った学校で教育を受けることで、複文化性を生得的に持つ学生が自身のアイデンティティに肯定的になれるのではないだろうか。

7. 総括と今後の展望

フランスという国は、多民族・多文化性をカオティックにその内側に孕みながらも、その一方で、共和国として国民に対してフランス人として「一つ」であることを要請する国であると考えている。そんなフランスへの訪問は、今回のフィールドワークで5度目の機会となったが、日本という規律と調和・中庸さを重んじる国で生まれ育った私には、未だに（だからこそ心踊りさえもするのであるが）あまりにも他者的な国に思えてならない。

今回の調査に協力してくれた人々は、皆がそのフランスのパリという土地に住み、生活をしている人々である。それでいて、そのような共通項に括ることの出来るような人々ではなく、皆がそれぞれに各自の立場や思いを持っており、その姿・様相はどれも著しく個別的なのであった。「ハーフの研究」という枠組みを持ちながらも、各対象者に対して深く調査を進めるたびに、むしろ翻って「ハーフというカテゴリー」の元で一般化するような結論を出すことからは離れていくような感覚がある。今回の調査を通して、その思いはより強いものとなった。というのも、「環境要因」という変数による日仏での生育環境の差異がもたらす影響を調査しようと試みたが、現段階の考察では、本変数による明確な差異は見出せていないからである。しかし、今後のインタビューの積み重ね、およびそれらのデータの比較によって導き出せる考察もあるのではないかという想定も残しながら、調査を続けていく所存である。

修士論文執筆に向けては、本フィールドワークで得た個別のインタビューデータを含めて、調査結果を何度も吟味する事になるだろう。エスノグラフィーという研究手法を採るのは私自身にとって初めてのことであるが、頑なに合理性に捕らわれた研究結果を目指すことがないよう心がけたい。たとえ要所においてどこか非合理的に見えても、そうした部分にこそ現実を生きるそれぞれの人間像が映し出されているような論文を完成させたいと考えている。彼らが私に預けてくれたかけがえのない言葉の数々をつぶさに見つめながら、丁寧に形にしていこうという決意を新たにしている。

8. 参考資料

[文献]

- ・ 岩渕功一(2014)『<ハーフ>とは誰か：人種混濁・メディア表象・交渉実践』青弓社。
- ・ 佐藤群衛(2007)「臨床という視点からの異文化間教育研究の再考-「現場生成型」研究を通して-」『異文化間教育』(35), 14-31, 異文化間教育学会。
- ・ 関口知子(2007)「移動する家族と異文化間に育つ子どもたち--CCK/TCK 研究動向」

『南山短期大学紀要』(35), 205-232, 南山短期大学.

- 田中智志(2002)『他者の喪失から感受へ：近代の教育装置を超えて』勁草書房.
- 田中智志(2012)『教育臨床学：<生きる>を学ぶ』高陵社書店.
- 藤田結子,北村文編(2013)『現代エスノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』新潮社.
- 藤谷悠(2015)『タンデム学習活動の実践・分析・考察 ~他者との協働によって開拓される自己と言葉の学び~』慶應義塾大学総合政策学部総合政策学科 2014 年度卒業論文.
- 柳田国男(2015)『日本人とはなにか』河出書房新社.
- 矢野智司(2000)『自己変容という物語：生成・贈与・教育』金子書房.

[Web テキスト]

- 朝日新聞デジタル 2015 年 11 月 15 日配信記事 「パリ同時テロ、128人が死亡 ISが犯行声明」<http://www.asahi.com/articles/ASHCG5GFKHCGUHBI02G.html>
- Huffingtonpost 2015 年 5 月 7 日配信記事 「宮本エリアナさん「人種への偏見、日本と世界からなくしたい」【ミス・ユニバース日本代表】」http://www.huffingtonpost.jp/2015/05/07/miyamoto-ariana-interview_n_7229170.html